

吉村さやか著（生活書院、2023年）

髪をもたない女性たちの生活世界 その「生きづらさ」と「対処戦略」

合場 敬子*

著者は本書の冒頭で「髪をもたない女性たちの経験は、調査者にとっても被調査者にとっても聞きづらく語りづらいことと捉えられ（中略）、研究の対象として焦点化されてこなかった」（10頁）と指摘している。当事者であるがゆえに、調査の過程で著者自身も困難を感じながら、しかし「聞きづらく語りづらい」調査上の困難を乗り越え、「髪をもたない女性たちの経験」を読者である私たちに届けているのが本書である。また著者自身が調査を進める過程で経験した困難も補論1で明らかにされている。それは著者自身が髪をもたない当事者であることにより「調査を始めるまで秘匿化し、ながらく言語化することのできなかった発症以降の経験」（18頁）から生じた困難である。そしてこの補論1が本書を非常に稀有なものにしている。

2012年からおよそ7年をかけて、「円形脱毛症を考える会」という当事者団体に、著者が当事者会員として参加し、丁寧なインタビューを基礎にしたライフストーリー調査法を使いながら、当事者である聞き手（著者）と語り手が今まで経験してきたお互いの「生きづらさ」を言語化し、それを軽減・解消しうる対処戦略——「ウイッグ生活」（第2章）、「このゆびとまれ」（第3章）、「さらす」（第4章）、「スキンヘッド生活」（第5章）——を考察している。「病気」というスティグマを隠蔽することを「パッシング」と定義した上で、「ウイッグ生活」は「パッシングによって生じる問題経験を『病気』や『障害』という社会問題として承認されやすい文脈ではなく、多くの女性たちが日常的に感じている『身だしなみやおしゃれの面倒さ』という文脈に位置づけることによって、『生きづらさ』を軽減／解消」（60-61頁）しようとする対処戦略である。「このゆびとまれ」の戦略は、当事者が経験する「生きづらさ」は個人的問題ではな

く社会問題であると意味づけし、「当事者同士のネットワークを形成し、クレーム申し立て活動を展開」（108頁）する戦略である。「さらす」は、円形脱毛症という病気を広く正しく知ってもらうために、「啓発活動の場ではかつらを外し、髪をもたない姿を『さらす』ことを通して、クレーム申し立て活動を行」（111頁）う戦略である。さらに、啓発活動の場以外の日常生活でも、かつらは使わずに、「髪をもたないままの姿（まだら頭・たまに剃ってスキンヘッド）」（167頁）で生活する戦略が「スキンヘッド生活」である。「ウイッグ生活」以外の戦略は、当事者が経験する「生きづらさ」を、個人的問題ではなく社会問題であると意味づけしていることが明らかにされている。

筆者は女子高生の体毛の除去について考察（合場 2022）をしたことがあるので、円形脱毛症の女性たちの「髪」に関わる「生きづらさ」と、筆者が調査の過程で出会った、非常に肌が弱い「体毛」を除去できない女子高生「恵」（仮名）の「生きづらさ」に共通点を見出した。本書の「ウイッグ生活」という戦略をとる髪をもたない女性たちは、「身だしなみやおしゃれに配慮しながら、『女らしく』生きる」（59頁）ために、ウイッグをつけている。なぜなら彼女たちにとって、頭に髪があることが自らの女性性の表示において重要だと認識しているからである。一方で、恵は「女の子」として体毛が無いことが望ましいことだとは知っていても、生理的な理由で体毛を除去できず、そのままにしていた。つまり両者が示しているのは、女性性が、「毛」は女性身体の頭にあるべきであるが、頭以外の女性身体に「毛」はあってはならないということで構築されている点である。同じ毛であるのに、生えている場所によって異なる評価を与えるという奇妙な規範が、日本を含む多くの社会で女性身体に対して働き、それにより女性の

* 明治学院大学国際学部教授

「生きづらさ」が生まれている。

このように女性性と髪の関係は本書の議論において重要な点であるが、その部分の説明が不十分である。本書では、英語圏の文献において、「古今東西を問わずいにしえの時代から、髪は女性性や女性美のシンボルと捉えられてきたことの確認作業がなされている」(12頁)と説明され、その具体例である図0-1は『『女性にとって髪は重要』であることを示す資料の例』(13頁)として掲載されている。しかし、細かい字で英語の文章と写真が表示されているのみで、内容を読むことが困難である。さらに著者は日本社会には『髪は女のいのち』といわれる根強いジェンダー規範』(10頁)があると主張しているが、この「根強いジェンダー規範」が日本社会においてどのように構築されたのが説明されていない。これはたぶん著者の他の論文で探求されているのかもしれないが、本書でも必要だったと思う。

さらに、「ウイッグ生活」という戦略をとる女性たちが経験している「身だしなみやおしゃれの面倒さ」を「ジェンダー役割のもとで女性一般が感じる『生きづらさ』」(209頁)と説明しているが、これは適切ではない。なぜならジェンダー役割を、筆者は211頁で結婚、出産、子育てと定義している。だとすれば、女性が特定の外見を表示することが望ましいとされ、そのために身だしなみとして化粧をしたり、脱毛したりすることを奨励されることで「面倒さ」を感じることは、ジェンダー役割が生み出す問題として把握するよりも、望ましいとされる「女性性」や「美」の規範との関係で説明したほうが適切である。実際、著者は表5-1(196頁)で、「ウイッグ生活」と「スキンヘッド生活」の対処戦略と「女性性」との関係を示し

ているが、「このゆびとまれ」と「さらす」という対処戦略と「女性性」との関係は明示していないので、それらをこの表に是非加え、考察してほしい。

終章では、著者が立脚する障害社会学が、「障害学とその主流的視角とされてきた障害の社会モデルに対する『反省』」(219頁)のもとに誕生したと説明されているが、両者の違いが専門外の筆者には分かりにくかった。特に、「国連・障害者権利条約」や「障害者差別解消法」などの成立は、障害の社会モデルの成果であると指摘されているが、もう少し具体的に説明してほしい。一方で、障害の社会学モデルがアクティビストとしてクレーム申し立てをする当事者に焦点を当てるのに対して、障害社会学がアクティビストとしての側面だけでなく、「可変的、且つ、流動的で、さまざまな属性とともに生きる、一生活者」(221頁)の側面にも光を当てることを行っているという点は理解でき、その生活者としての側面を本書は生き生きと描きだしている。

筆者は本書によって円形脱毛症という病と、それによって髪を失った女性たちが多様な戦略を駆使しながら、日常生活を生きていることを知ることができた。本書は、著者がインタビューした多くの女性たちが持っていた、円形脱毛症という病を広く正しく知ってもらいたいという願いを実現することに大きく貢献している。一人でも多くの人に本書を読んでほしい。

参考文献

合場敬子, 2022, 「無毛化する女子高生の身体」『女性学』(日本女性学会)第30号: 52-72.